

種 名 サネカズラ
万葉時代の呼名 さねかづら



詠人 藤原鎌足

万葉集卷二 九四

玉くしげみむろの山のさねかづら
さ寝ずはつひにありかつましじ

【現代訳】

鏡王女よ、君は素敵だね。その君と一緒に寝ないでいられますか。
そんなことはできません。耐えられませんよ。

【サネカズラの解説】 マツバサ科の常緑つる性木本

ビナンカズラ(美男葛)ともいうが、これは昔つるから粘液をとって整髪料に使ったためである。関東地方以西、西日本から中国南部までの照葉樹林によく見られる。庭園に植えることもある。葉は長さ数 cm でつやがあり互生する。ふつう雌雄異株で、8 月頃開く花は径 1cm ほど、10 枚前後の白い花被に包まれ、中央におしべ、めしべがそれぞれ多数らせん状に集まる。雌花の花床は結実とともにふくらみ、キイチゴを大きくしたような丸い集合果(単果は径 1cm ほど、全体では 5cm ほど)をつくらせて冬に赤く熟しよく目立つ。果実を漢方薬の五味子(チョウセンゴミシ)の代わりに使うこともある。古歌にもしばしば「さねかづら」「さなかづら」として詠まれ、「さ寝」の掛詞として使われる。

名にし負はば 逢坂山のさねかづら 人に知られでくるよもがな
(藤原定方、百人一首 25/後撰和歌集)